

特集 女性の政治参画

- 2~3面 寄稿・安藤優子 (キャスター・ジャーナリスト)
- 4~5面 議会に女性を送ろう! 武井多佳子 (愛媛県議会議員)
- 6面 25歳で市議会議員に 諸岡英実 (小牧市議会議員)
- 7面 「投票ポスター」の取り組み 惣田紗希 (イラストレーター)

女性たちの一歩で
前進させよう

The Young Women's
Christian Association

YWCA

8

AUGUST
2023

No.775

(第33総会期主題聖句)

平和を実現する人々は幸いである
—マタイによる福音書5章9節—

(ビジョン)

女性がリーダーシップを発揮し、
人権・平和・環境を大切にす社会

(ミッション)

若い女性をエンパワーし、共に社会変革を進めます。

(バリュー)

キリスト教基盤 平和・環境 人権 セーフスペース

www.ywca.or.jp

真・民主主義へ

戦後、日本は「民主主義」の道を歩み始めました。誰もが主権者としてかわり、市民の多様な声が反映された政治、あらゆる人が尊重される社会を目指したはずでした。

しかし、いまでも政治の現場は男性ばかりで、人口の半分を占める女性ですら少数派。一部の人の声だけが大きく響く政治と社会に、不信任や諦めが漂っています。

女性たちがもつと政治に参画したら、この社会を変える大きな一歩になる。

みんなで踏み出して、真の民主主義へと前進させよう。



生きづらさの根源は「イエ中心主義」の政治にあり

キャスター・ジャーナリスト 安藤優子

「あるべき女性像」はどこから来たのか？

見渡すかぎり、男性一色の風景。いえ、もつと端的に言えばまるで「おじさんの海」。大学生だった私が、ひよんなきつかけでテレビの報道番組でアルバイトをすることになって、初めて報道の現場に足を踏み入れたときに、目の前に開けたのがそんな「おじさんたちの海」でした。もう40年以上前のことです。

それが今やテレビ局には報道に限らず記者やディレクター、ついには局長にまで女性があふれ、活躍をしています。そんな光景を見ると隔世の感があります。ですが、本当に私たち女性に注がれる社会の視線は大きく変化しているのでしょうか。

私が昨年7月に出版した『民主党の女性認識 イエ中心主義の政治指向』は、

そつした女性に注がれる社会の視線、たとえば、「女性は子どもを産んで一人前」「女性はまずは家事や育児を優先させるべき」などという、いわゆる「べき論」「らしさ論」は、いったいどこからやってきているのだろうか、という疑問から出発した研究です。その発端はこれまでの自分の仕事への向き合い方への反省がありました。話はテレビ報道の世界に入ったころに戻ります。私に最初に与えられた仕事は、男性司会者の横にいる「アシスタント」でした。具体的には、男性司会者の話にうなづくこと。それがほとんどすべてでした。メインの男性司会者の「アシスト」をするというと聞こえはエレガントですが、実態は主に従属する「添え物」です。当時、女性アナウンサーは、お天気情報などのやわらかいニュースを読むのが当たり前で、政治や経済といった「固

い」ニュースは男性の口から語られるべきものでした。視聴者にとつてもそれが当たり前で、まさに「女は女らしく、控え目に」が求められていたのです。ですから、その後私が海外取材を任されるようになって、「これは〇〇ではないでしょうか？」などとちよつとした所感を差し挟んだりしようものなら、「女のくせに生意気だ」と山のようにフレームが寄せられたのを覚えています。

「おじさん」に同化した反省から

アシスタントを卒業し、少しずつ記者のような仕事を始めると、今度は岩盤のような「オトコたちの城」を築いてきたおじさんたちとの間にハレーションが起き始めました。そこで、私は「私はあなたと敵ではありません」というサインを送って、おじさんたちに可愛がっ

てもらつた作戦に出ました。自分をペット化して見せたのです。さらに仕事をもつと任されるようになる、「私も仲間です」と、自分をおじさん化して見せる、つまり同化して、「オールド・ボーイズクラブ」の一員のようにふるまつたのです。そのころの写真を見ると、いつも飾りを一切排したダークスーツでニュースを伝える自分がいます。でも、そうやって「女性であることを封印して」仕事にあたってきたことのいびつさに、あるとき気が付きました。女性であることは私のアイデンティティーの一部で、それをあえて封印したりすることは、女性性に対するリスペクトを欠いているのではないか。そう思い至つたとき、私が仕事をする上で感じてきた「女性はこうあるべき」の女性への視線の正体を知りたいと、研究のテーマが決まつたのです。

そつしてたどり着いたのは、私たちに



著書
紹介

『自民党の女性認識 「イエ中心主義」の政治指向』

発行／明石書店（2022年）
2500円+税

安藤さんが社会学者として執筆した学術書。戦後の自民党政治において、女性に対する認識がいかに形成され、戦略的に再生産されてきたのか。国会に女性が増えない原因を解き明かす。



profile

安藤優子 [あんどう・ゆうこ]

1958年、千葉県生まれ。上智大学比較文化学部比較文化学科（現・国際教養学部）卒。テレビ朝日系の報道番組を経て、1987～2020年、フジテレビ系ニュース番組のメインキャスターを歴任。2008年、上智大学大学院グローバル・スタディーズ研究科修士課程修了。2019年、グローバル社会学博士号取得。2023年から椋山女学園大学客員教授。

向けられてきた「べき」「らしさ」論に象徴される社会の「女性認識」は、戦後長らく政権与党としてこの国の政治をけん引してきた自民党の政党戦略として、この社会に意図をもって再生産されてきたといえます。

「女の役割を規定した 『日本型福祉社会論』」

ごく簡単に整理すると、1970年代に台頭した「日本型福祉社会論」という考え方によって、女性は家庭内の「安全保障」を担う「家庭長」と位置づけられました。「家庭長」たる女性が、妻として夫を元気に会社に送り出し、母として子どもをすこやかに育て、介護者として義父母の面倒をしっかりとみれば、家庭内は

万事うまくいく。つまり、家庭内の安全保障が成立するという、考え方です。そして、それは国の福祉予算軽減につながる、としてオイルショックによる景気減退のタイミングで、政権与党・自民党の政策として取り入れられました。「家庭長」とされた女性は、無償で福祉予算軽減のために頑張ってきたというわけです。

「家庭長」は女性への社会の認識をも規定してきました。「家庭をつつがなく守る」ことが優先されるのですから、女性は一個人として認識されるのではなく、常に「イエ」の構成員＝妻・母・娘として認識されるのです。だから、「結婚して当たり前」「子どもを産んで一人前」といった社会認識がより強固に出来上がってきたのです。さらに、やっかいなのは、「家庭長」

「誰もが「個人」として 尊重される社会へ」

は「イエ」にいないてはならないので、「お父さんは外で仕事、お母さんはお家で家事」の性別役割分業論が「世の中の常識」としてまかり通るようになりました。その最たるものが、政治です。

「政治は男の仕事」と言ったのは、かのアリストテレスでした。日本は今なおそんな古代の「常識」の壁にあえいでいます。ほぼオトコたちが作り上げてきた「政治」の世界。彼らが24時間ファイティング・ポーズを取って、「政治家」として作り上げた牙城は、そのことを可能にした「家庭長」たちの無償の汗と涙と努力が土台を築いているのです。

「女性議員を増やそう」というと、必ず「女性だからって議員になれるのは、逆差別だ」と反論されます。それは間違いです。なぜなら、これまでほぼ100%男性で作られてきた民主主義のルールこそ、差別だと思っからです。

私は、こう願っています。女性でも男性でも、誰でも、自分が成りたいと思うようになれる社会になってほしい。一人ひとりの個人が、きちんと個人としてリスペクトされる社会であってほしい。その一歩として、この国の意思決定の場である政治の世界にもっともっと女性がかわってほしい。そう、心から願っています。

民主主義の根幹 政治の場にもっともっと女性を!

愛媛県議会議員
松山YWCA会員

武井多佳子



ジェンダー平等を
どう押し上げていくか

6月21日、「ジェンダー・ギャップ2023」が公表され、日本が146カ国のうち125位、過去最低となりました。やはり、心は折れますね。特に民主主義の根幹である政治分野が138位、世界のスピードに追いついていない日本

の「ジェンダー平等」をどう押し上げていくか、考えさせられます。しかし、2023年の春は全国的に女性議員が増えるという歴史的な統一地方選挙でした。女性議員が一人もいない「ゼロ議会」は22年末の時点で257議会もありましたが、今年4月までに選挙があった128議会の34%、44議会でも女性議員が当選しました。長野県北相木村では戦

後初の女性議員が誕生したそうです。41道府県議会議員選挙の投票率は、過去最低の41・8%でしたが、30議会でも女性が増え、22議会でも過去最多。これにより、都道府県議会の女性議員の比率は14・5%になりました。特に、香川県と鹿児島県は10ポイント以上伸び、20%を超える議会は5議会に増えています。党派別を見ると、自民68名、立憲50名、共産43名、公明28名、維新18名、国民民主6名、参政党2名、社民党1名、諸派5名、無所属95名でした。ジェンダー・ギャップの解消に向けて、ともに力を合わせてほしいと心から願います。

一歩ずつ前進するも
現場では課題山積

また、88の市長選に28名の女性がチャレンジし、7名が当選。東京23区では、3名が当選。これにより都内6区のリリーダーが女性となりました。やっと「議会に女性」が市民権を得てきたのではないでしょう。私が、注目していたのは杉並区、岸本聡子区長のアクションです。区議会選挙

の際には、区長自ら投票率を上げるために街頭に立ち、党派を超え女性候補者と並んで投票を呼び掛ける映像は感動的でした。結果的に、投票率は43・6%。前回よりも約2万票も増え、定数48のうち女性が24名を占めました。一歩、一歩、前進しています。

暮らしの中で女性一人ひとりが
「権利意識」を深めて

もう一つ、ジェンダー平等を求めて私たちが声を上げるために、自ら足腰を鍛える必要があると思っています。日々の暮らしの中で女性の権利への意識を深めるということです。私は「えひめミモザの会」という学習会を開き、3年前から「女性差別撤廃条約」を読み進めてきました。ただ条文を読むだけでなく、私たちが置かれている職場や地域、家庭や歴史を

現状に引き付けて、考え、議論するという学びです。これによって、「権利意識」を高めることができただけでなく、自分の主張に自信が持てました。長年、ワークショップにさらされてきた私たちに必要なプロセスだった気がしています。松山YWCAの活動として条約を読んだ方の感想の一部をご紹介します。「81歳の私からすれば、もっと小学4、

5年の時から自分の権利について教えてほしかった、が実感です。子どもの数・出産間隔・出産する時期を決定するのは女性の権利とは、当然のことながら、私には新鮮でした」

権利とは学び続けることだなと実感しました。そして、市川房枝さんの言葉、「権利の上に眠るな」が思い浮かびました。権利を忘れる、知っていても主張せずに

黙っている、これでは権利がないのと同じになる。自戒の思いを込め、ここに記したいと思います。

権利の上に眠らず、私たち女性が権利を学び、主張することがジェンダー平等への道であり、民主主義につながるのではないのでしょうか。世界125位ですから、前進あるのみです！



『女性議員を増やしたい ZINE』
著／濱田真里 発行／タパブックス（2023年）
1000円十税

なぜ日本は女性議員が少ないの？ なぜ女性議員を増やす必要があるの？ 増やすために私にできることは？ こんな疑問を持った人に、政治分野のジェンダー平等について、基礎から分かりやすく説明。女性議員を増やすことの意義を知ることができる。巻末には「選挙ボランティアのしおり」や「もっと知りたい・行動してみたい人のおすすめ本リスト」などアクションにつながる情報も掲載。あらゆる人が生きやすい社会に向け、多様な人々が政治にかかわるための最初の一步を考える一冊。

YWCA の本棚



もっと知りたい！ 女性議員と民主主義のこと



『女性のいない民主主義』
著／前田健太郎 発行／岩波書店（2019年）
860円十税

日本は「民主主義の国」であるのに、指導者的地位に就く女性が極めて少ないのはなぜなのか。標準的な政治学で扱う政治、民主主義、政策などのテーマをジェンダーのレンズを通して見ると、女性の社会進出を妨げる「公・私」男・女」のような目に見えない規範や、「男性稼ぎ主モデルの福祉国家」制度の存在が浮き彫りになってくる。女性比率のクリティカル・マス（変革をもたらす必要最低限の量）とされる30%の達成と、そのため*のクオータ制導入が「女性のいる民主主義」への第一歩だ。

*議会における男女格差是正のため女性の比率を割り当てる制度

個人的なことは政治的なこと！ 声が届く実感が持てる議会へ

小牧市議会議員
諸岡英実



学校の出前授業やタウンミーティングを通じて主催者教育、人権・ジェンダー課題などについて話し合う場を設けている。写真は包括的性教育の必要性について考えるイベントにて

声を上げなければ悪化するだけ

政治家の家系でも、地主の家系でもない私が、なぜ政治に関心を寄せ、政治家になるに至ったのか。それはコップの水がひたひたと溜まり「ある時」こらえきれずにあふれ出すようなものだった。

2011年、東日本大震災による福島

第一原子力発電所の事故が、私にとって「その時」だった。自然災害が暮らしを襲い、誤った政治判断が繰り返し暮らしを苦しめる。「どうせ声を上げても暮らしは好転しない」よりも「政治を自分事にして声を上げなければ、暮らしは悪化するばかり」が上回った、高校2年の春。「若者は政治に無関心」という言説に違和感を覚えながら、一人で立ち上がった。

そのうちに同世代の学生たちとつながり、活動団体を結成した。2015年、安保関連法案が強行採決されようとする際には、国会前で学生たちと共にマイクを握った。「立憲主義を尊重する政治が必要」と考える学生らと出会ったことで、一人じゃない安堵感を得ると同時に、若者は政治に無関心ではないことを証明した。同時期に、ある女性国會議員と出会い、秘書として政治に関わった。性暴力被害者の支援、待機児童問題やLGBT差別解消に取組む彼女の背中を見て、視点が変われば政策も変わるんだと実感。同時に女性国會議員、女性地方議員の圧倒的な少なさに驚いた。私も政治を動かす場所に行こう。心に灯（ひ）がともった。

25歳で市議会議員に

2019年、小牧市議会選挙の年、25歳になった。この間の活動で、地域の多様な声をカタチにする受け皿の不足に気付いた私は、被選挙権を行使することに決めた。不安もあったが「今」しかないと考えた。早朝は車でピラを配り、昼は商業施設や街頭で奨学金返還問題や若者の貧困について訴え、夜は仕事帰りの車に手を振った。

1913名（1名は自分）の期待を背負って当選した私は、すぐに活動を始めた。奨学金返還支援制度の創設、若者が投票しやすいう期日前投票所の増設、同性パートナーシップ制度導入や保育園で排出された使用済み紙おむつの園内処分化など、多様なライフステージに立つ市民の要請にこたえようと努めた。また、コロナ禍のため議会報告を動画で配信したほか、オンラインによるタウンミーティングの機会を設けたことで「相談してよかった」と言ってくれる同世代も増えた。実現に至ったマニフェストもあり、手ごたえを感じている。

小さな声が、政治も社会も変える

10月には任期満了を迎えるが、私たちの挑戦はいつも、終わったところから始まる。

二期目も、地域課題の当事者一人ひとりの小さな声を尊重し、その声の受け皿をつくりたい。それは課題解決の

ためだけではない。「自分の声が届いた」という実感を持つことができれば、主権者としての自信につながり、市民の政治参加を促すことになる。それによって、みんなで政治を、社会を変えていくことができるかと信じている。声を上げて変わらぬ、などと諦めないでほしい。

プロフィール

もろおか・えみ
1994年、愛知県小牧市生まれ。誉高等学校卒業。ミュージカル「アニー」出演。「SEALDs東海」ほか複数の活動団体を立ち上げ、国會議員秘書を経て、2019年、小牧市議会選挙に立憲民主党公認で立候補。最年少、7位（定数25）で初当選。「暮らしがカラフルに輝き出す、生きていて住んでいて良かった」と思える小牧市」を目指す。



市議会での一般質問。行政の改善点や必要な政策を提案。根気よく当局とやりとり

「きっかけ」を 仕掛けて 社会にうねりを!

グラフィックデザイナー・イラストレーター

惣田紗希

政治家を選ぶのは私たち

東日本大震災をきっかけに、教科書で習った程度の認識だった原子力発電所が、生活に大きな影響を与える危険をはらむものという認識に変わった。

自然災害が多い日本に、なぜこんなにも原発があるのだろうという疑問から歴史をたどるうちに、それらを取り決めてきたのは「政治」であることに行き着いた。そうして原発反対のデモに足を運ぶようになり、声を上げる方法を知ったのだけど、そこで掲げられる爆弾やドクロの図柄に萎縮したりもした。主張としては同じ思いでそこに居ながら、デモを外側から見た人が攻撃的な表現を受けて問題を遠巻きにする気持ちも分かり、しばらくモヤモヤした。

政治家を選ぶ唯一の手段である選挙を意識するようになり、2013年のイン

ターネット選挙運動解禁を機に、イラストで投票を呼びかける待受画像を作りSNSにアップした。普段の仕事の延長としての自分の表現なら、仕事を通してイラストを知ってくれている人にも伝えることができるのではないかと、一緒に問題を共有できる人が見つかるのではないかと考えた。それから選挙のたびに画像をアップしたり、それをポスターとしてネットプリントに登録して誰でもプリントできるようにしたり、個人的な実践を細々と続けた。そのうちに、政治に不安や憂いを抱く人たちとゆるやかにつながっていった。

一枚のポスターをきっかけに

2021年、コロナ禍の衆議院議員選挙の際、友人の編集者とデザイナーと共に「投票ポスター」というプロジェクトを立ち上げた。

第一に、より良い未来への変化を求め、多様なポスターを通して投票を呼びかけ、ここ数年の低い投票率を少しでも上げるため。次に、投票ポスターをつくる、貼る、シェアすることで、身近な人と選挙や政治について話し合う「きっかけ」をつくるため。そして、一人で政治的な発信をする勇氣や自信のない人が、これを土台に踏み出してもらうため。この趣旨に賛同したクリエイターたちが、個性豊かなポスターを提供してくれた。政治との距離感は一それぞれ違うからこそ、その取っかかりとしての表現は多様であればあるほどいい。

たくさんの「一人」のチカラで

デモやこうしたアクションは、主要都市で行われることが多い。地方の小さな街に住んでいる自分としては、メッセージや態度、雰囲気を含めて同



2023年統一地方選挙の「投票ポスター」。自由にダウンロードして困りごとを書き込み、貼る、シェアする。「わたし」の困りごとを解決するのが政治の役割であり、政治家を選ぶのは「わたし」であることを表現した

#投票ポスター
2023

公式HP



instagram



そうだ・さき
1986年、栃木県生まれ。桑沢デザイン研究所卒業後、デザイン会社を経てフリーランス。音楽関連のデザイン、書籍装丁のほか、イラストレーターとして国内外で活動。2013年、東京から栃木県にUターン。

意できるアクションを身近な範囲で探すのは容易ではない。それに参加するための移動が大変だ。また、利権関係や昔からの慣例で選挙の結果は決まってきたっていると諦めてしまいがちだ。仲間やコミュニティを見つけないのは難しいし、周りの目も気になる。でも、投票ポスターならば、多様な表現から自分の気分にあうポスターを選べる。自分で作ってもいい。馴染みの店に貼ってもらい、選挙について話さずきっかけをつくる。自分の部屋に貼って「いいな」と思ったら、SNSにシェアしてみる。どこにいても、たった一人でも始められるアクションを目指した。

それじゃ伝わらない、変わらない、と言う人は少なからずいる。すぐに大きな変化は起きないかもしれない。それでも、たった一人のアクションで、たった一人に伝えることができた。たった一人が、たった一枚のポスターを貼ることができたら。それが小さな呼びかけとなり、その先にいる他の誰かの「きっかけ」になるかもしれない。社会や政治のことを一緒に話したり考えたりしていける仲間が見つかるかもしれない。その希望を少しずつ積み重ねていきたい。



サステナブル(持続可能)なYWCAを語る

5月27日、第33総会期の第3回加盟YWCA中央委員会が大阪YWCAを会場に、4年ぶりに対面と一部オンラインで開催された。

開会のメッセージで藤谷佐斗子会長は、2025年に120周年を迎える日本YWCAの、100周年を迎えた年から現在までの総会期ごとの会員数と主要な取り組み、そして世界YWCAの動向を振り返った。示された数字は厳しいものであったが、地域・日本・世界YWCAとが有機的につながり、ビジョンを共有するために、組織として成長していこうという力強いメッセージであった。午前中の議事では、日本YWCAの東日本大震災被災者支援活動について、これまでの働きを顧みて今後の展望を検討するために、理事会の下に「com7300特別委員会」を設置したこと、また、ネットワーク強化委員



会と地域連携委員会が合同して「Y'sネットワーク委員会」となったこと等が報告された。中高YWCAに関しては啓明学院中学校・高等学校YWCA部の解散と普連土学園からの加盟の申請がそれぞれ承認された。また、今年度は韓国で日韓シニア(7月)ノユース(2024年2月)カンファレンスが対面で、世界YWCA総会(11月)がオンラインでそれぞれ開催されるなど、国際関係でも大きな動きがある。

午後は、次総会期に向けてYWCAの新しいカタチを探るために、参加者がアイデアや思いを率直に語り合う時間を持った。前半は、4つの委員会からの発題と問題提起を受け、「ワールドカフェ」スタイルで話し合った。参加者たちは、異なるテーマが設定された複数のテーブルを移動しながら、活発な議論を展開した。

3月にニューヨークで行われたCSW67

(国連女性の地位委員会)でパラレルイベントを実施したユースメンバーからのオンラインによる報告を挟んで、後半のテーマ「サステナブル(持続可能)な会員活動のために」を話し合った。現状では地域YWCAへの所属が困難だが、活動には参加したい人がいるという想定で、地域・日本YWCAにできることや仲間を増やす仕組みについて意見を出し合った。女性を取り巻く社会状況と人々の意識がめまぐるしく変化中、従来の会員制度や市YWCAという枠組みにも発想の転換と柔軟な対応が望まれる。120周年、さらにその先へ向かって持続可能なYWCAの未来像について、これから議論を重ねていきたい。

日本YWCA書記 吉田亜希



ご協力ありがとうございます

賛助費

大城美代子 小野小夜子 磯村美保子
木田順子 郡恭子 坂口和子
鹿野幸枝 武内富貴代 牧甫
皆川悦子

ピースメーカーズ募金
(平和を創り出す女性のリーダーシップ養成)

柏木妙子 嘉屋陽子
コザヨシノリ 菅野真知子
鹿野幸枝 鶴崎祥子 皆川悦子
大阪女学院高等学校
活水高等学校・活水中学校

平和教育寄付金
木岡ファミリー基金

災害時支援募金

(国内外の災害被災者支援)
小野小夜子 嘉屋陽子
坂口和子 武内富貴代 牧甫

(オリーブの木キャンペーン募金)
木岡ファミリー基金

(ウクライナ支援)

上野學 柴田冬樹
武内富貴代 別所加恵
学校法人捜真学院

沖縄YWCA
一般社団法人札幌YWCA

(パレスチナYWCA支援)
嘉屋陽子 別所加恵

(ビルマ/ミャンマー支援)
新倉春美 別所加恵

東日本大震災被災者支援募金
嘉屋陽子 武内富貴代
学校法人捜真学院

(カーロサポーターズ募金)
カーロサポーターズ 56件

(2023年4月16日〜6月15日
敬称略)